昭和31年2月20日第三種郵便物認可　平成26年6月5日発行（木曜日発行）（5月29日発売）第59巻第21号

週刊新潮

6月5日号
400円

21

東京情報 confidential

連載 第70回

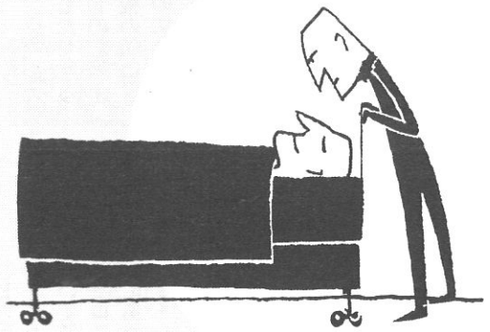
死ぬ権利、死ぬ義務

S・P・I特派員 ヤン・デンマン

【東京発】知人の大学教授が死んだ。昨年の夏には私の事務所にも遊びに来てくれたが、秋口に脳溢血で倒れた。都内の病院に見舞いに行くと、すでに意識は朦朧としており、舌を巻き込まないように固定する処置がとられていた。全身は点滴の管でつながれており、腹に穴を開け、食物や水分を送り込む胃瘻を行う予定だという。

元気な頃の彼なら、そこまでして生き延びる道を選んだだろうか？

看護師が入ってきたので、病室を出て同じフロアの待合室で缶コーヒーを飲んでいると、彼の同僚のS氏が現れた。



イラスト・谷山彩子

友人の変わり果てた姿を見て、S氏はかなりショックを受けたようだ。旧知の私に軽く会釈した後は、下を向いてソファーに座っていた。

自然の摂理

先日、青山で行われた教授の葬儀でS氏と再会した。

「ミスター・デンマン。僕もこの歳になってわからなくなりましてね。結局奴は半年苦しんだのです。よく頑張ったと言う人もいますが、死にゆく本人はどれだけ幸せだったのか。食事もとることができず、チューブで栄養を送り込まれるだけなら、生きているミイラみたいなものです。結局、家族が『最後まで見捨てなかった』という言い訳を得るだけではなかったのか。僕は奴を畳の上で死なせてやりたかったです」

これは延命治療が抱える問題だ。先日、自民党のプロジェクトチームが尊厳死に関する法案をまとめた。そこでは、医師の免責事項として「延命措置の中止」が盛り込まれることになっている。また、ALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者に生命を維持する人工呼吸器をつけるか否かの決断についても、現在法整備が求められている。

S氏が涙を浮かべる。

「これまで議論されてきたことではありますが、だらだらと長生きするのは本当にいいことなのでしょうか？　僕は延命措置の停止を求めることに〝尊厳死〟という言葉を使うのはおかしいと思う。それを言うなら、昔は尊厳死ばかりでした。昔は自然に死ぬしかなかった。一部の臓器が病に侵されれば、他の臓器は健康でも、死ぬしかなかったのです」

たしかに延命治療の発達により、生と死の境があいまいになってきたような気がする。

私が不思議に思うのは、日本の宗教界が尊厳死について多くを語らないことだ。彼らは信者に対し、現世的な利益を約束したり、今の辛さから抜け出すための道を説いたりする。しかし、魂の救済や死については深い部分まで扱わず、せいぜい葬式で説法するくらいだ。

しかし、人が死ぬときには、魂の救済が必要になる。ソ連共産党書記長のブレジネフでさえ、死の床でロシア正教にすがり、司祭を呼んだ。唯物主義・唯物史観では自分の死を解明することなどできない。

S氏が頷く。

「その点、欧米の宗教界では延命措置の是非に関する議論が活発ですね。カトリックの教書には『か細い生命の維持でしかない延命措置は、やめる決定をしても良心上何の問題もない』とあります。自殺を禁じているカトリックが延命措置の停止を肯定するのは変だと思う人もいるかもしれません。しかし、自殺は自然の摂理に反しているから許されないのであり、その論理でいけば、過度な延命措置は自然の摂理に反した行動となるわけです」

死を受け入れる

日本でも、延命治療を拒んで、壮絶な死を遂げた作家がいた。吉村昭だ。妻の津村節子が彼の最期を語っている。病院を出た吉村は、自宅のベッドに横たわり、自分に取り付けられていたチューブを、最後の力を振り絞って全部外した。その数時間後に彼は死んだが、最後まで意識はあったという。

寿命は天の定めである。そして文字通り、命を寿ぐことでもある。それはあくまでも、自然に死ぬからだ。

延命措置を施した瞬間に「死」は物質的なものになる。医学の発達が、現代人の死生観を狂わせている部分があるのではないか？

斎場から地下鉄の駅に向かう道を歩きながら、S氏がつぶやいた。

「結局、常日頃の覚悟ということになると思うんです。森鷗外が帝室博物館の総長だった頃、芥川龍之介と小島政二郎が『舞姫』や『うたかたの記』の頃のような作品を書いてほしいと迫ったそうです。すると鷗外は『俺の顔を見ろ。死相が出てるだろう』と言った。ハッとした2人は黙って部屋を後にします。鷗外は常に死に向かい合っていたんです。『高瀬舟』に登場する島流しの舟に乗る罪人も自分の死期について考えていたはずです。気高く切腹をする藩士の姿にフランスの役人たちが恐れおののく『堺事件』、殉死できない屈辱に耐えかね一族が全滅にいたる『阿部一族』など、鷗外は文学で死を突き詰めたからこそ、自然に自分の死を受け入れることができたのではないでしょうか」

かつての日本人には死の覚悟があった。すべての責任を放棄し、我先にと逃げた韓国セウォル号の船長と、大日本帝国海軍の第六潜水艇の艇長だった佐久間勉を比べるとそれがよくわかる。佐久間は、死の間際まで自分が置かれた状況を、明治天皇への謝罪の言葉と一緒に克明に記した。

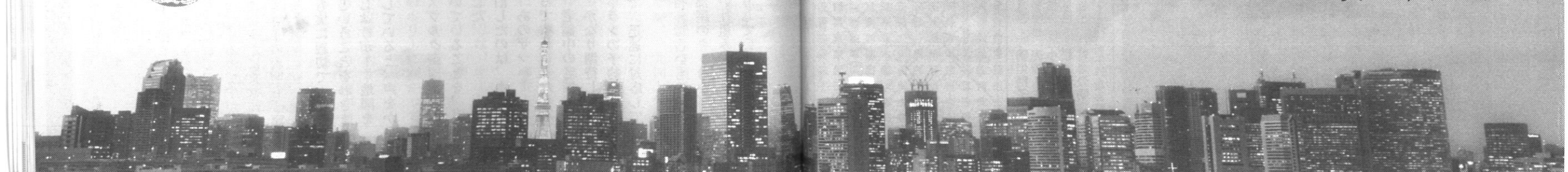
その際、自分の命や家族について言及することはなかった。いざとなったら命を捨てる覚悟ができていたのだ。

今の日本は命を最優先する国になっている。しかし、責任感のない長寿国家ほど土台の脆いものはない。一人一人が死と対峙しなければ、それこそ延命するだけの半分ミイラのような国になるだけだ。

駅のホームでS氏と別れたときの言葉が印象的だった。

「日本では死について考えることがタブーなんです。だから死に関わる議論を避けようとする。それが原因で相続問題も発生してしまうのです。不治の病が治るようになったのはいいことですが、一方で、われわれ現代人は死ぬきっかけを失ってしまったのではないでしょうか？」

手塚治虫のマンガ『ブラック・ジャック』にこんな話がある。天才外科医ブラック・ジャックのところに彼の恩師が運ばれてきたものの、手を尽くしたが死んでしまう。彼がうなだれていると、恩師の霊が出てきて言う。

「人間が生き死にを自由にしようとするなんて、おこがましいとは思わんかね」

私もそろそろ遺書を書かなければならない。